



「本物」と「クローン」

富山県高等学校長協会

会長 田中 宏育

先日、黒部市芸術創造センター・セレネ美術館に「クローン文化財降臨展」を見に行った。正直、私自身あまり美術には興味がなく今まであまり美術館に足を運ぶことはなかったのだが、今回は、第二次世界大戦の空襲により灰となった日本に存在したゴッホの幻の「ひまわり」（通称「芦屋のひまわり」）の復元、ゴッホの「星月夜」、ドガの「青い踊り子たち」、マネの「笛を吹く少年」、法隆寺金堂釈迦三尊像（飛鳥時代・国宝）の現状再現、火災で失われた法隆寺金堂壁画（飛鳥時代）の焼損前復元等、美術の教科書で見たことのある代表的な美術品の「クローン文化財」20点あまりが展示されていると言うことを聞きつけて行くこととした。セレネ美術館は、黒部峡谷鉄道宇奈月温泉駅の目の前にあり、大きくはないが趣のあるとても良い美術館であった。

「クローン文化財」の存在を私は今回初めて知ったのだが、「クローン文化財」とは、劣化が進んだり、破損して失われたりした歴史的な文化財や芸術作品を、オリジナルの詳細な調査を行い、デジタル技術とアナログ技術の双方を駆使し、絵具や基底材などの成分、表面の凹凸、筆のタッチまでを忠実に再現するべく、最新のデジタル技術、専門的な知見、職人の伝統技術を組み合わせて精巧によりみえらせたもので、この技術を開発した東京藝術大学が国内外の作品の復元を進めているものらしい。従来の複製と大きく異なる点として、ひとの手技や感性を取り入れることで、文化的背景や精神性など、「芸術のDNA」にいたるまで再現することがあるということだ。

文化財は、貴重なもので、状態を損なうことなく後世に残すのにベスト方法は、一般に公開しないことだそう。 「クローン文化財」には6つの意義があり、①文化財の保存と公開という矛盾を解決。②文化財の独占から共有へと大きく舵を切るきっかけ。③人材育成を通して、

自国の文化を自らの手で守り、広めること。④消失した文化財や欠損・変色した文化財を限りなく元の状態に復元。⑤クローン文化財を前に誰でも鑑賞し、触れる。⑥クローン文化財そのものが、国境を越えて移動して、人々の眼前に公開。

しかし、日本が誇る重要な文化財の「偽物」「コピーキャット」「模倣」をつくる、と言うとマイナスなイメージがつき、実際に「クローン文化財」に対しては批判的な声もあるが、テクノロジーの力で文化財を高次元に保存し、何かリスクがあったときにはデータから再現できるようにしておくことは、非常に意味があると考えられているようだ。

今回、数々の「クローン文化財」を間近で鑑賞してみて、本当に本物と変わらない（本物を私は見たことがないのだが）、もしかしたら本物以上の出来映えであり、私自身非常に感動した。一方で、「本物」と「クローン」とは何かを考えさせられもした。

もう一つ、会場で作品横のQRコードからユーチューブの動画にアクセスでき、学芸員のアバターが登場し作品の魅力や時代背景を説明してくれた。（当日はアバターだと気づいていなかった。）作成したのは地元の建設会社が、セレネ美術館から依頼を受け、動画生成AIツールに解説文と学芸員の映像を取り込み、声や表情を再現したそう。ここでも、最先端技術が取り入れられている。

昨今、生成AIなどの発達により、本物と偽物を見分ける力や、生成AI等の最新のテクノロジーをしっかりと使いこなす倫理観が大切だと言われている。その通りだと私も思う。一方、「クローン文化財」のように目的をしっかりと持った使い方には興味関心をそそられた半日となった。

しかし、今日見た美術品の一作品でも本物を一度は見てみたいと思いながら帰路についた。